

ミニみゆうず 2021

発行
県立新潟女子短期大学
英文科・英文学科同窓会
県立新潟女子短期大学
英文学会

〒950-8680
新潟市東区海老ヶ瀬471番地
県立新潟女子短期大学同窓会
「かざし会」



Dear Graduates

I joined Niigata Women's College in 2001, and I spent many good years there. Now, I live in Kyoto, but I sometimes visit the campus on Google Maps. These days the number of buildings has increased, and it is a little different from my memory. However, I am delighted that I still have contact with students from those days. I hope you still have a chance to use English. My children speak Kyoto-ben now, and I cannot always understand them. Raising children in another language is a natural way to learn! One memory of Niigata City is when I was interviewed by NHK Niigata. I was a little disappointed to see that subtitles were added when I answered in Japanese. In fact, mastering pronunciation is the most difficult point of second language learning. But we must never give up! Exchanging ideas and opinions is the true goal of language learning. If we take a test, accuracy is essential, but not for communication.

If you wish, please send me a greeting. dgoulson@hotmail.com



Cherry blossoms 2021
with my daughter 愛礼菜



告知

16回生の皆様、2022年の来年、16回生の第5回目の同窓会を開催したいと思えます。詳細はこれから、詰めます。来年の春ごろには書面にて、16回生の皆様に告知したいと思えます。出来ましたら、お手紙がスムーズにお手元に届きますように、最新のご住所の登録、ご変更を県立大学のホームページにてお手続き完了をお願いしたいと思います。
還暦同窓会につきましてはのご提案、ご要望がございましたら、kentanshimp@gmail.comの渡部敦子までご連絡くださいませ。後ほど渡部の個人連絡先をご案内させて頂き、同窓会につきまして、ご相談させて頂きたいと思えます。5年分の思いを込めた楽しい同窓会に致しましょう！
追記：新型コロナウイルスがいまだに猛威を奮っております。どうなるかのご連絡も検討したいので、是非、ご連絡先のアップデートをよろしくお願いたします。



(渡部 敦子 (16回生))

ご挨拶

皆様、毎日いかがお過ごしでしょうか。

Life is a series of choices.

人生は選択の連続である。という言葉があります。大きなものから小さなものまで、私達は毎日、実にたくさんの方々の選択をしているそうです。自分の今ある姿は、過去の自分の決断の結果とも言われます。

今回こうしてまた、2年ぶりに皆様にお会いすることが出来ました。心からうれしく思います。これも選択がもたらしてくれたプレゼントなのだと感じています。

今日はミニみゆうずを読んでゆっくり過ごすと、いう選択をされて、ゆったりと落ち着いた気持ちになっただけだったらうれしいです。

その気持ち、明日からの数々の選択をする際の原動力になってくれることを心よりお祈りしています。

戸根 喜子 (22回生)

挨拶では、「過去が現在を作る」かのように書きました。それを受けて思い出し後悔などは、決してなさらないでください。未来が過去を作る」という考え方もあります。現在や過去の不本意な部分も「よい未来」から考えると「むしろそれがよかった。」と思えるようになるそうです。選択ミスだったと思われることも、未来の何かに必要なことであったと考え、気楽に行きましょう。
「Take it easy」ですね。
現在シユリンクラブ副会長16回生渡部敦子さんは、英文科同窓会の仕事を一手に引き受けてくださっています。その上中学校教諭として忙しい中、「きらりシユリン人」として、新潟県立大学のホームページで、英文科同窓生のご活躍を紹介されています。可能な方は是非ご覧になってみてください。ご覧になるのが難しい方もいらっしやうと思えます。「きらりシユリン人」はとても評判がよく、ミニみゆうずの紙面上で、ゆっくり読みたいという声もたくさん届いております。英文科同窓生の皆様全員に見ていただければ、次回発行のミニみゆうずでは、「きらりシユリン人」の掲載を考えさせていただきます。お楽しみに。
次回、2年後の発行を予定しております。シユリンクラブの皆様全員の「よい未来」を確信しつつ、会長として一日一日を大切に過ごしていきたいと思っております。
数々の失礼お許しください。ありがとうございました。

(戸根 喜子)

編集後記





卒業18年

中村(薩摩) 陽子(39回生)

今回、「みゆづず」へ寄稿するにあたり、卒業してもう18年も経ちますが、県短での2年間を懐かしく思い出しました。私は秋田出身のため、卒業後は新潟に行くこともなく、すっかり疎遠になってしまいました。2年間を共に過ごしたみんなも元気でいるでしょうか。

私は東京で就職した後は、海外勤務を経験するなど、仕事漬けの日々を送っていましたが、4年前に14年間続けた仕事を辞め専業主婦に。最近やっと主婦業に慣れてきたところ。生きがい5年前に保護した猫2匹。子供の様に可愛がっています。仕事を辞めたことも相まって環境問題や動物保護に関心が向くようになり、勉強会に足繁く通いました。また去年は通信大学を卒業し、今年宅地建物取引士の資格取得を目指します。趣味ではピアノとダンスを楽しんでいます。やりたいことを応援してくれる夫に感謝しつつ、いくつになっても新しいことを学び、そしてチャレンジしていきたいと思っています。



英語が紡ぐ

佐藤(時田) 千秋(39回生)

県短を卒業して、今年でちょうど15年が経ちました。卒業後すぐ、借越ながら同窓会役員を拝命しましたが、みゆづず発行をはじめとして同窓会活動に際し、先生方や多くの卒業生の方々は大変お世話になりました。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。本当にありがとございました。

県短卒業後は地元金融機関勤務の後、実家の手伝いで自覚めた農業の世界に飛び込み、現在は結婚をきっかけに、夫の転勤先の佐渡島に娘と3人で暮らしています。新型コロナウイルス流行以前の佐渡島では、大型客船が寄港する際の歓迎イベントや、旅行で訪れた外国の方々と交流する機会が多く、卒業後で一番多く英語を使う機会がありました。英文科卒と言いつのが恥ずかしくなるくらい英語でしたが、現役時と同じように気持ちだけは前のめりです。苦笑。最近では通訳ボランティア団体に所属し、国際交流イベントのお手伝いをさせて頂きました。佐渡在住の外国籍の方々と交流はとても刺激的で、翻って佐渡や日本のことを学ぶ貴重な体験でした。

思えばこの転々とした人生の中で、自分を励まし、奮い立たせてきてくれたのが、県短で出会った仲間達です。自分自身が連絡無精にも関わらず、近況を気遣って連絡をくれたり、相談に乗ってくれたり、本当に感謝してもしきれない存在です。

年齢を重ねるごとにそれぞれ置かれる状況が違ってくる、全体での連絡網も途絶えがちですが、そのような中で、このみゆづずが再び会話をすきつけかけになってきたかと思えます。そのみゆづずがこの度お休みになると聞き寂しい限りですが、現在では同窓会のHP内で「きりしゅりっぴん人」と題して、英文科の先生方や卒業生の方々の近況を伺うことができます。様々な方のご尽力のお陰で定期的に更新され、とても充実した内容で、いつも楽しく拝見しています。まだの方はぜひ一度ご覧ください。

今度一緒に文化祭に行きたいね。などと話していたところで現在の状況になり、今は難しいですが、また懐かしの海老ヶ瀬で仲間達と集合する日を夢見ている今日この頃です。



高山めぐみ(39回生)

県短で、尊敬する友人達に出会えたことは、私の人生の財産だと思います。努力家だが芯が強い。人に優しく自分に厳しい。夢や目標に向かって頑張っている。笑顔が絶やさない。そんな、素敵な仲間に出会えました。共に過ごして語り合った2年間は、私の宝物です。

私は、英語とこども、二つの「好き」を軸に就活し、卒業後、こども英会話スクールに入社しました。新人教師時代は失敗の連続で、「夢だった仕事に就けたのに、何故こんなに苦しいんだろう...」と、涙することもありました。そんな時、とことん私の話を聞いてくれ、励まし、背中を押してくれたのも、県短で出会った友人たちでした。私の勤務する英会話スクールは、2019年、千葉県流山市に新規開校をし、私はマネージャーとして立ち上げに携わることになりました。

新潟で生まれ育ち、県外どころか、(恥ずかしながらも)実家すら出たことなかった私は、この時、内心かなり不安で、せつかくのチャンスを手放すことも頭をよぎったのでした。

新規開校は、まず第一に、学校の認知度を上げることが重要。私は、一日の大半を広報活動に費やしました。「転勤」でなく「転職」をしたのだと自分に言い聞かせ、毎日毎日、外へ出て、道行く人に声を掛け、チラシを配りました。

生徒数0名、一から学校を作っていくことは、想像を超える大変さがありますが、あの時、チャンスを掴まなかつたら、絶対に味わえなかつた気持ちを噛みしめ、掛け替えのない経験をさせて貰っていました。開校から二年、1500名の生徒たちの笑顔が私のパワーの源です。



中川(日水) 多佳子(16回生)

皆様、お元気でお過ごしでしょうか。学生時代の思い出の中で、まず思い起こされるのは超運動音痴の私が何か体育祭実行委員長になってしまい(一)、種目を考えたり、景品のお菓子を買い出しに行ったりなどの準備や体育祭当日の運営も慌ただしかったけれども、委員の仲間たちにも随分と助けていただき、無事に役目を務められたことです。そんな思い出が、つい昨日のように蘇ってくるのに、月日が経つのは早いものです。先日、かざし会広報担当でもある渡部敦子さんから届いた16回生のグループLINEで「来年は還暦を迎えるけど、コロナ禍で同窓会開催は見合わせませんか？」の文言と仲間とのやりとりを見て、今更ながら「歳をとったなあ」と実感しています。

私は県短卒業後、新潟伊勢丹に1期生で入社し今日に至ります。入社当時は同窓生も多くいて、同年代が多かったためか学生生活の延長のような雰囲気も職場にありました。が、年を追うごとにだんだん同窓生は減っていき今現在の同期入社した県短出身者は私を含めて二人だけとなりました。キャリアとしては家庭用品などのリビング担当の在籍が長く、好きなものに囲まれ職場の仲間やお客様から多くのことを教わり育てていただいたことは、本当にこの仕事を続けてきて良かったと思っています。近い将来の定年退職後は、地域社会の人とつながることで社会貢献したいと考えています。資格取得したサーブ・認知症・防災・助士の知識や技能スキルを活かせるような活動ができると良いのですが...今はコロナ禍で、今まで当たり前でできたことができなくなりました。結婚式やお葬式をはじめ大切な節目の行事やイベントにも人は集うことができず行動は制限され、私たちの生活に大きく影響を及ぼし続けています。コロナ収束まで長い時間がかかると思いますが、平穏な日々が必ず戻ってきます。皆様、どうぞお身体に十分注意されてお過ごしください。



英語が紡ぐ

佐藤(時田) 千秋(39回生)

県短を卒業して、今年でちょうど15年が経ちました。卒業後すぐ、借越ながら同窓会役員を拝命しましたが、みゆづず発行をはじめとして同窓会活動に際し、先生方や多くの卒業生の方々は大変お世話になりました。この場をお借りして改めてお礼申し上げます。本当にありがとございました。

県短卒業後は地元金融機関勤務の後、実家の手伝いで自覚めた農業の世界に飛び込み、現在は結婚をきっかけに、夫の転勤先の佐渡島に娘と3人で暮らしています。新型コロナウイルス流行以前の佐渡島では、大型客船が寄港する際の歓迎イベントや、旅行で訪れた外国の方々と交流する機会が多く、卒業後で一番多く英語を使う機会がありました。英文科卒と言いつのが恥ずかしくなるくらい英語でしたが、現役時と同じように気持ちだけは前のめりです。苦笑。最近では通訳ボランティア団体に所属し、国際交流イベントのお手伝いをさせて頂きました。佐渡在住の外国籍の方々と交流はとても刺激的で、翻って佐渡や日本のことを学ぶ貴重な体験でした。

思えばこの転々とした人生の中で、自分を励まし、奮い立たせてきてくれたのが、県短で出会った仲間達です。自分自身が連絡無精にも関わらず、近況を気遣って連絡をくれたり、相談に乗ってくれたり、本当に感謝してもしきれない存在です。

年齢を重ねるごとにそれぞれ置かれる状況が違ってくる、全体での連絡網も途絶えがちですが、そのような中で、このみゆづずが再び会話をすきつけかけになってきたかと思えます。そのみゆづずがこの度お休みになると聞き寂しい限りですが、現在では同窓会のHP内で「きりしゅりっぴん人」と題して、英文科の先生方や卒業生の方々の近況を伺うことができます。様々な方のご尽力のお陰で定期的に更新され、とても充実した内容で、いつも楽しく拝見しています。まだの方はぜひ一度ご覧ください。

今度一緒に文化祭に行きたいね。などと話していたところで現在の状況になり、今は難しいですが、また懐かしの海老ヶ瀬で仲間達と集合する日を夢見ている今日この頃です。

渡辺 智美(40回生)

4月、今年はお鬼太鼓の音が島の至るところで聞こえてきて、ようやく佐渡の春を感じる事ができました。この島に移住して3年半。春と秋には山の恵みをいただき、秋には趣味でアオリイカを釣ることを覚え、冬は毎週海鮮丼が食べられるくらい海の幸が美味しいこの島は、本当に宝の島だと思えます。不便だという人もいるかもしれませんが、便利は金で買えるけれど、この自然と生きることができる幸福は、金を積めば手に入るものではないと考えます。

しかしこの春、佐渡は大きな打撃を受けました。季節外れの霜が降り、1億7000万円の損失かと言われています。また、海水温の上昇などにより、牡蠣の養殖や、海での漁がうまくいかないと聞きます。いままですら前のように行っていた農業や漁業が、気候変動の影響を受け、島民の生活は揺れています。

日本海に囲まれている佐渡島は、少し車を走らせれば絶景の景色を眺めることができますが、ふと足元に目を落とすと、浜には数えきれないほどのプラスチックが落ちています。本当に数えられないし、全て拾うことなんてできないくらいに、浜には無数のゴミが広がっているのです。漁業に使うのであろう浮きや網釣りの仕掛け、異国の文字が書いてある食品のケースと多くの前に賞味期限が切れている日本製のペットボトルなど、海流に乗ってやってきたと思われる様々なものを目にします。一方で、厚さ1センチの透明なガラスが故意に割られて砂浜に隠されていたり、錆びた農機具や冷蔵庫が無造作に転がっていたりすることもあります。おそらく、産業廃棄物として処理する金を節約するための放棄でしょう。

佐渡は島全体が、地球の成り立ちを学べるジオパークになっています。そのガイドを務める友人が、一緒に浜を歩きながら「そのうちプラスチック層ってのができるんだろうな」とつぶやきました。そのあと、「でもその前に、人間が地球そのものを滅ぼすかもね」と続けたのを聞き、まったく笑える気持ちにはなりません。私たちは漠然と、異常気象があったって、未曾有の災害があったって、それでもまだまだ大丈夫と過信をしている気がします。SDGsという言葉が市民権を得て、いろんな場面で環境に配慮する広告が見られるようになってきましたが、いまだに「安さと便利」を日本人は追及しすぎていてと感じます。浜に落ちたプラスチックを見て、「ひどいことをする人もいるもんだ」と他人事にしてしまうのは何か違います。プラスチックの恩恵を少なからず享受している自分が、この浜のプラスチックに全然関わっていないなんて、そんなことは言えないと思うのです。

去年から、友人たちと醤油を手作りすることにしました。作った醤油は瓶に入れて保管するため、少し使用するプラスチックが減りました。畑を手伝うようになり、農薬と肥料が実は地球に負荷をかけていることを知りました。私は雑草を抜きますが、友人は雑草もそのままにする自然農法を行っています。私はこの島に来て、自然と上手に生きることを学んでいます。人間、ひとりでは生きていけないとよく言いますが、人間だけでも生きてはいけません。自然と(地球と)生きる私たちのこの生活が、失つのは簡単だけれど取り戻すのは非常に難しいということ。福島第一原発の事故によって私たちは知っています。技術や政治家に任せるのではなく、私たち一人ひとりが、自分自身の生活を見直さない限り、私たちに豊かな未来はないのではないのでしょうか。

